

海外レポート

カナダの小児科カンファレンスの経験

沖縄県立中部病院・ハワイ大学卒後医学臨床研修事業団
ディレクター 安次嶺 馨

1 はじめに

太平洋に面したアメリカ大陸西海岸は、日本になじみのある都市が多い。私はロサンゼルス、サンフランシスコ、ポートランド、シアトルなどは、若い時から何度か訪ねたことがある。しかし、カナダのバンクーバーは、まだ訪ねる機会がなかった。

ブリティッシュ・コロンビア大学小児科の救急専門医Goldman教授を中部病院のコンサルタントとして招いて以来、私は彼と親しくおつきあいしている。今回、彼の主催するカンファレンスに出席するために、バンクーバーを訪問する機会を得た。

ゴールドマン教授はイスラエルで医学部を卒業し、小児科の研修を終えた。その後、カナダにわたり、トロント小児病院で研究を続け、救急部のスタッフとなった。現在、バンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学に移動して7年目で、北米の小児救急のリーダーの一人として活躍している。彼は日本人的な感性を持つ礼儀正しい医師で、日本にも多くの友人をもっている。今回の訪問では、カンファレンス前の多忙な時に空港で私を迎え、ホテルまで送ってくれた。また、沖縄から来た若手小児科医を食事に誘ったり、彼の勤務する小児病院を案内するなど、親切に面倒を見てくれた。

2 カンファレンスについて

ゴールドマン教授が中心になって、バンクーバーで毎年秋に小児科医、小児救急医、家庭医を対象にした臨床カンファレンスを企画している (Clinical Pediatrics, Family and Emergency Medicine Conference)。出席者の大部分はカナダ西部の臨床医であるが、一部、アメリカやアジアの国々からも

参加がある。

3日間のカンファレンスは時間割りがゆったりしていて、日本のこの種のカンファレンスなら、2日間ですんでしまうであろう。

一日のスケジュールの概要を示すと、8:00~10:00に2~3の特別講演、教育講演があり、30分の休憩を挟んで10:30~12:00に3つのワークショップが組まれている。ランチはホテル内の大広間で、出席者が相席で談笑しながら食べる。午後は13:00~14:30にワークショップと臨床症例発表がある。これで一日のスケジュールが終わり、後はショッピングや観光にゆったり時間を当てることができる。

主な教育講演のタイトルを示す。

- 1) スポーツによる頭部外傷と現場復帰のガイドライン
- 2) 思春期の薬物依存
- 3) 小児ぜんそくの治療Up to date, 2014年版
- 4) 予防接種による病気の予防
- 5) 偏頭痛のEBM

主なワークショップのテーマは、以下の通りである。

- 1) 肥満とメタボリックシンドローム
- 2) 小児の異物誤飲
- 3) ALTEにどう対処するか?
- 4) Googleを用いた症例の検索法
- 5) 思春期の症例検討

ワークショップには、実地医家が多く参加していたが、ディスカッションでの知識の深さ、活発さには感心させられた。生涯教育の一環として位置づけられるカンファレンスであるが、出席者がただ講演を聴いて学ぶというのではなく、自らも積極的に議論に参加して、学ぶと言う姿勢が強く感じられた。

専門医取得後も定期的に再試験を受けて資格を更新するというアメリカ、カナダの専門医システムによるものと思われた。

Keynote lecture として、医療関係者外から2人の講師が招かれ、興味深い講演を行った。

航空機製造会社ボーイングの主任テストパイロットのKillberg氏は、「Lessons about safety and learning from aviation world」と題し、厳しい航空業界の安全教育を医療の安全に関連させて講演した。

盲目のスイマーで、パラリンピックでメダルを獲得した Tildesly氏は、「The dream and journey of one child」と題して自身の幼小児からオリンピック選手として成長する過程を淡々と語った。手を引かれて演壇に登場した氏は、開口一番「Hello, it's nice to see you」と言って聴衆を笑わせた。端正な顔立ち、講演中笑みを絶やさないう爽やかな語り口は、私たちに大きな感動を与えてくれた。

3 研修医の研究発表

症例研究発表は47題あり、日本からの発表は11題であった。そのうち、沖縄の若手医師たちによる4題の発表がなされた。カンファレンス企画者のゴールドマン教授はたびたび日本に招かれ、日本には多くの友人知人がいる。

前年に中部病院にコンサルタントとして招かれた際、研修医たちと回診をしたり、講義をしたりして、その熱心な指導と面倒見のよい人柄がスタッフや研修医たちから慕われていた。彼の誘いで、4人の若手がカナダで発表することになり、私もお目付役として同行することにした。



ホテルの窓から望むバンクーバー港

カンファレンスの発表は、病院のモーニングカンファレンスの雰囲気の中で行われ、研修医たちも落ち着いて発表し、ディスカッションに加わっていた。彼らの発表したタイトルを列挙する。

- (1) 吉年 俊文 (在沖米国海軍病院)
Pediatric appendicitis score : First validation study in Japan
- (2) 竹蓋 清隆 (沖縄県立中部病院)
Pediatric injuries from poisonous marine animals
- (3) 泉 絢子 (沖縄県立中部病院)
Comparison of Gram stains and culture for febrile infants under 3 month-old visiting the emergency department.
- (4) 本村 朱里 (沖縄県立八重山病院)
A case of 1-year-old child who developed encephalopathy due to dietary thiamine deficiency

吉年の報告は、ゴールドマン教授がカナダで実践している虫垂炎診断のレクチャーをもとに、中部病院の症例を後方視的に検討したもので、よい内容であると評価された。竹蓋のジェスチャーたっぷり、自信に満ちたプレゼンと相まって、ハブクラゲ刺傷の発表はかなり聴衆にインパクトを与え、フロアから多くの質問があった。泉の感染症診断におけるグラム染色は、最近、アメリカやカナダでは医師自ら行うことは少ないので、いくつかの質問があった。本村は、南部医療センター・こども医療センターで経験した興味ある脳症の症例を落ちついて報告した。

大きな専門学会ではないが、比較的コンパクトな臨床カンファレンスで専門家の講演を聞き、また症例報告をするという体験は、若い小児科医たちにとって大きな意義があったと思う。今後、若者たちが海外の学会などで発表する経験を積んで、国際スタンダードの医師になってほしい。

4 バンクーバーについて

太平洋に面した西海岸に位置するバンクーバー市は、人口60万余の中都市であるが、周辺部の都市圏人口は210万人で、カナダ第3位の都市圏を形成し

ている。中国人をはじめ、多くのアジア系の人々が住んでいる。ダウンタウンを歩いていると、アジアの国にいと錯覚するくらい、アジア料理、日本料理などの看板が目につく。

バンクーバーは自然豊かなカナダの西の玄関口で、林業と観光業が主産業である。2010年には、第21回冬季オリンピックが開催された都市として、よく知られている。カナダパシフィック鉄道の西海岸終着駅であり、また、カナダが太平洋から世界各国につながる重要な海港として、バンクーバーは発展してきた。そんなバンクーバーには、カナダ屈指の名門ブリティッシュ・コロンビア大学があり、その附属小児病院は、トロント小児病院とともにカナダを代表する小児病院である。

カンファレンス開催前日、私たちはゴールドマン教授の案内で、小児病院を見学した。木々に囲まれた広い敷地内に多数の施設群があった。とくに彼の本拠地である救急部は、じっくり見学させていただいた。

国立成育医療センター総合診療部で活躍中に急逝した洲鎌盛一先生が、若い時にこの病院で小児神経学を学んだことを思い出し、感慨深いものがあった。

5 アメリカ西海岸の友人たちを訪ねる

バンクーバーからの帰途、米国西海岸のワシントン州タコマ市とオレゴン州ポートランド市に、古い友人を訪ねた。いずれも、かつて中部病院のハワイ大学コンサルタントとして、研修医たちを指導した小児科医である。

バンクーバーからタコマまで2時間足らずの飛



バンクーバー小児病院の正面

行。シアトル・タコマ国際空港には、ハート先生とセツ子夫人が迎えてくれた。ハート先生はこれまで3度中部病院に招かれたが、3年前は3ヶ月間の長期コンサルタントとして沖縄に滞在した。ハート先生の住宅からは、タコマ富士とも呼ばれるレーニア山（標高4,392m）の圧倒的な雄姿を望むことができた。

彼の家で、昼食に地元産の新鮮なサーモンステーキを食べた後、勤務先のMary Bridge小児病院を見学した。民間総合病院に併設した小児病院であるが、救急室や病室はゆったりしていて、良い環境で子どもの医療ができると感じた。

翌日は、タコマを発って、ポートランドへひとっ飛び。空港にはタルウォーカー先生とスシマ夫人が迎えてくれた。タルウォーカー先生は、中部病院に10年の長期にわたってコンサルタントとして勤務し、1983年から92年まで、ハワイ大学プログラムのディレクターを務めた方である。ご夫妻とは、実に20年ぶりの再会であった。70代後半のお二人とも思っていた以上に元気そうだった。夜、近くに住む次男のロニー夫婦と子供たちも加わって、インド料理の夕食を楽しんだ。

翌日はあいにく小雨模様のぐずついた天気であったが、市街地を見下ろす丘の上のOregon Health Science University へ。ここは20年前にもタルウォーカー先生とともに訪れたが、かつて、ゆったりしていた敷地には多くの建物がひしめき、大学が拡大発展しているのを実感した。この大学は、中部病院から多くの医師が研修に訪れ、また、指導医が中部病院に招かれた所である。



救急室を案内するゴールドマン教授

6 おわりに

中部病院のハワイ大学卒業後医学臨床研修プログラムは、毎年10人以上の指導医を招いて、レクチャーや教育回診をしてもらっている。ブリティッシュ・コロンビア大学のゴールドマン教授は、沖縄の研修医たちに海外学会での発表の機会を与えてくれた。教師としての役割をカナダからアジア、ヨーロッパに向けて広げていくことに、彼自身この上ない喜び

を感じている。彼は、昨年二度目の中部病院訪問をしたが、今後とも、彼を招いてほしいとの声は多い。彼自身も沖縄が気に入って、沖縄は自分の第二の故郷のようだと言っている。

今回バンクーバーのカンファレンスに参加し、若い小児科医たちが海外の医師たちに伍して、医療・研究活動を行う時代がきたことを実感した。



カンファレンス終了後、ゴールドマン教授のランチに招待された日本人参加者

海外レポート

日本小児科医会国際部、台湾小児科医会との交流会に参加して

ぐし こども クリニック
具 志 一 男

2013年11月2日から2泊3日で台湾高雄市小児科医会との学術討論会と台湾小児科医会との交流会に参加した。本会は、日本小児科医会国際委員会と福岡地区小児科医会（丹々会）の合同での交流会で、以前から1年ごとに行われている。日本小児科医会としては、国交のない国との交流ということで、丹々会が中心ということで設定されている。

今回の参加メンバーは、日本小児科医会国際委員会5名と丹々会3名、それぞれから婦人2名の計10名でした。11月2日は、東京(7:20→10:15松山空港)、名古屋(9:50→12:20)、福岡(10:10→11:50)、那覇(11:55→12:30)(出発は日本時間、到着は現地時間)からばらばらに出発、台北・桃園国際空港で13時頃(現地時間:時差1時間)に集合しました。台湾新幹線(高鐵)で、桃園駅から台湾南部の高雄・左榮駅まで1時間40分の移動でした。台湾新幹線の車両は日本からの輸出で、新幹線と同じように揺れの少ない安定した車両でした。高雄は、台北より南に300km弱で、北回帰線の南にあり、熱帯に属しており、気候的に沖縄と変わらない台北よりも暑かった。人口270万人の台湾第2の都市で、随一の工業都市である。宿泊先の漢来ホテルでは、高雄小児科医会の先生方の歓迎を受け、荷解きをするや否や歓迎会会場の中華レストランへ直行した。地区の小児科医会長はもちろん、医師会長や役員の方、婦人方も加わり、30名余の大宴会となり、お互いの挨拶から、カラオケまで熱烈歓迎を受けた。

11月3日は9時15分より漢来ホテルの会議室で、われわれのメンバー10名と台湾南部地区の小児科医会と台湾小児喘息・アレルギー学会のメンバー約40名が参加して、台湾・日本小児科医会学術討論会

がスタートした。

日本側からは、①「小児科医院における病児保育」(植山先生:福岡)、②「2012-2013年のインフルエンザシーズンにおける練馬区での学級閉鎖の解析」(沼口先生:東京)、③「乳児健診における育児・発達支援」(山崎先生:愛知)の3題の発表があった。高雄小児科医会からは、①「アレルギー予防のためのたんぱく質栄養」(楊生楠先生)、②「インフルエンザにおける肺炎球菌感染」(鄭名芳先生)、③「川崎病におけるTH2免疫反応」(郭和昌先生)の3題の発表があり、それぞれの演題に質疑、応答が行われた。発表の中で、台湾の完全母乳の平均期間は、2.1か月で、6か月の完全母乳は、15.9%とのことであった。

その後は、全員で昼食を食べながら懇親会を行った。その中に、受付の手伝いをしていた小児用肺炎球菌ワクチンのメーカーの方がいたので、日本では今月(2013年11月)からPCV13が定期接種となると話した。台湾では3-5歳の1回接種が始まったところで、2014年から1歳以上の2回接種、2015年から2か月以上の接種が開始されるとのこと、先を越されたと悔しがっていた。B型肝炎は1987年から定期接種を行っており、全体的に予防接種は日本より先んじていただけに悔しかったのであろう。

懇親会の後は、左榮駅より台湾新幹線に乗り台北へ向けて出発した。5時過ぎに台北に到着した後は、宿舎であり、台湾小児科医会との懇親会場でもある、シェラトンホテルへ直行した。会場には台湾大学小児科名誉教授である呂鴻基先生を始め、李庶務担当理事、他3名の先生の参加があった。台湾の健康保険制度や小児科の対象年齢などについて意見交換を

行った。沖縄の小児病院のことを聞かれ、成人科と併設であることやNICU、PICUもあることを説明した。

4日は、交流会はなく、夕方からの帰国だったので、午前中は故宮博物院を見学をした。清朝時代の翠玉白菜や肉形石など有名な展示を見ることができた。書のエリアでは、漢字の成り立をアニメーションで説明するコーナーがあり、いろいろな字を見ていると時間を忘れそうになってしまった。彫刻工芸でも細かい細工の名品ぞろいで、こういう作品を作らせるだけの余裕のある中国皇帝の権力のすごさを垣間見た。午後は、空港に移動する合間の時間で、台湾一の漢方、乾物、布問屋街である迪化街での買い物を楽しんだ。昔の（最近は行ったことがないので知らないが）那覇の平和通を思わせる街並みで、通路いっぱい商品が並べられてあり、すれ違って通るのがやっとという幅で懐かしく感じた。さらに、昭和初期か大正かというような建物が並んでおり、タイムスリップしたような気分させられた。台北市内からは、約1時間で登園国際空港へ移動、それぞれの飛行機で帰国した東京（松山空港から18：15→21：55）、名古屋（17：15→20：45）、福岡（17：35→20：40）、那覇（18：45→21：00）（出発は現地時間、到着は日本時間）。

今回初めての台湾訪問であったが、（高雄はやや暑かったが、）気候も沖縄とほぼ同じで、時差も1時間しかなく、国内移動のような感覚で行くことができた。街中の風景も、看板などが簡体字でないでなんとなく意味が分かり、別世界へ行ったような気がしなかった。交流会では予防接種やアレルギーは、同じような悩みを抱えており、共通の認識が持てた。台湾では、病児保育は無いようで、たくさんの質問をうけ、興味を持たれた様子だった。他県より、近い国であり、小児科としての共通の課題も多く、これからも交流を深めていく必要性を感じた。追伸：個人的にその後も台湾を訪れる機会があり、2014年は、父の母校（台南工業専門学校：現成功大学）の校舎が残っているということで、高雄の少し北の台南を訪れた。



台湾高速鐵道の車両（新幹線に似ています）



高雄小児科医会の歓迎会



台湾・日本小児科医会学術討論会



台湾小児科医会との懇親会